

今昔物語集の用字意識

はじめに

漢字片仮名交りで、いわゆる和漢混淆文風に書かれた今昔物語集に接して、後世の者がまずはとる態度は、いうまでもなく「よむ」態度である。

仮名交りとはいえ、その仮名のはほとんどは二行小書きの送り仮名で、場合によってはその送り仮名さえもないままの漢字の連なりを「よむ」場合、まずは現代もそれらのかなりな部分の漢字を使用している我々は、現代慣用の感覚を自然にあてはめて「よむ」。つきには、多くの注釈書で、手数をかけてなされているように、今昔物語集成立前後の古辞書類が載せる和訓を参照して「よむ」。あるいは、当時のかな文学等の言葉づかいをもとに、文脈上必然と思われる用語を探り、その用語を宛てて「よむ」。岩波古典大系本・小学館古典全集本をはじめとする現代の今昔物語集のテキストは、おおよそそのようにして訓んだ「よみがな」をつけて我々に提供されている。

けれども、今昔の個々の文字をいかに「よむ」かは、今昔筆者が、この作品を漢字仮名交りで書いたとき、いかに「かい」たつもりだったかというところから出発すべきであろう。漢字がまだ何ほどか異国の文字としての匂いを残していた時代、その漢字によって和語和文を

木村紀子

記述するにあたって、ある一語の用字をどうするかは、今昔の筆者にとってしばしば筆を滞らせる問題だったことは、漢字化を諦めた大字のカナがきの散見や、一部の欠字によって容易に察せられる。むしろ、今昔の前半部分を中心としたかなりな部分は、漢字表記された先行文書の書承が介在していたとも見られるし、すでにしばしば言われるように、和語表記の際の常用漢字といったものも、僧俗の識字層において徐々に共通化しつつあったと思われる時代でもあった。そうした背景にたつた今昔の漢字記述は、大筋ではおそらくおのずと機械的書写であったり、半ば無意識的であったりもしたのであろう。最近までの表記にかかわる研究によって明らかにされている今昔の文字表記のある程度の安定性¹⁾とは、むしろ機械的無意識的用字であったゆえに生じた一面も多い。

新撰字鏡・名義抄・字類抄といった、本来は様々な漢文に付された和訓の集大成である辞書の「よみ」は、漢文風のもの書承が窺えるものについては、いわば機械的にあててよいかもしれない。しかし、もともと口語りからの出発で、おそらく漢文的文字化を経ることはなかった今昔後半部分を中心にみられる用字について、とくに多訓がある場合の辞書の訓を適宜あてて「よむ」ことにはすこし問題がある。それは、実際以上に今昔の用字にユレがあるように見せてしまおうし、

当時、漢語(音)のままの通用語であったものを無理に和訓することもおこりうる。本朝世俗部の漢字表記が、多くの用語において、一語一字の定着が顯著であるように、そこではあくまで、一つの和語をどの字で「かく」かとして書いたのである。

ところで、語りの類纂や文体においては、形式的な整合性を完璧なまでに貫こうとした今昔は、文字表記についてはそのような態度はあつたのかなかつたのか、また、天竺・震旦部/本朝仏法部/本朝世俗部における漢文訓読風/和漢混淆風/和文風という文体上のきわめて大雑把な三分は、用字上でも何らかの切れ目となつてあらわれているのか、といったことを確かめることは、この大部な作品が単独者の一筆に成るのか、仮にもたとえ僧房などの共同作業的な影も窺えるのかといったことを確かめる上でも、何ほどか有益である。仮に複数の編者が居たとして、形式的な文体上の統一なら首尾一貫させることが比較的容易でも、用字の隅々にまで意志統一をはかることは、正書法のない時代、きわめて困難と見られるからである。

今昔の、あくまで表現的立場に即しての用字法の検討は、名義抄や字類抄の和訓の検討とむしろ相補的位置にあるだろう。それは、古代後期、和語が、意味のズレをいかに克服して他言語の表意文字であつた漢字を獲得したかの過程が、ダイナミックに現れた世界でもある。まずは、きわめて一般的に目立つ用字について、右のような視点からの検討を試みることにしたい。

一

今昔物語語彙の中で、現代の用字意識からは目立って特異な用字と映る一群に、いわゆる情意性形容詞の一部の用字がある。たとえA「不審シ・可咲シ・器量シ・微妙シ・奇異シ」、B「糸惜シ・六惜シ・墓无シ・破无シ・四度解无シ」等である。これらは、Aの漢文中での

訓説が先行したと見られるものと、Bの何らかの意味解釈(たとえは、糸を惜しむほどの切ない気分イトラシ、死後墓も無いようなむなし非在感ハカナシといった風な)にもとづく宛字と見られるものに大別される。それらはしかし、今昔時点で独自に採用された用字というより、大部分は「むしろ当時の普通の漢字が普通に用いられているといつてもよい」(小学館古典全集『今昔』(3)解説)ものであることは、岩波大系本ですでに注されているように、名義抄、字類抄等の古辞書類や公家日記等に散見される用字であることから推察される。右に挙げたうちで、「微妙シ」以外のものは、本朝部はもちろん天竺・震旦部で用いられる若干の場合も、すべて同一用字である。それらは、今昔筆者にとつてはむしろ半ば無意識的用字だった可能性もある。ただ、右のA・B二群のように単純に分けることのできる二大別は、和語を漢字表記する際の両面的態度を、おのずと示していることになるだろう。

ところで一方、情意性形容詞の中には、今昔の中で一つの用字に定着していないものもいくつかある。なお、それらも含め形容詞全般にわたる表記を中心とした整理と考察は、佐藤武義氏によってなされたものがある。まずは本稿の目的に沿って、その中のオモシロシについて見ておきたい。

オモシロシには、「面白シ・譚シ」と二様の用字がなされている。

「譚シ」は、岩波大系本第三巻³⁹⁴頁頭注44にあるように、日本霊異記上巻三十縁の訓注に出るものである。さらに大系本靈異記のその部分で注されるように、新撰字鏡に「何怜也 心楽也 於毛志呂之」とさされて出るが、古代通用の俗字だったかと思われ、正字は明らかではない(あるいは笑うべき意の「諡」か?)。しかし、「一応古くからのA訓読系のもので見てよいものだろう。他方「面白シ」は、古語拾遺の著名な語源説「衆面明白也」や、さらにさかのぼって万葉集にも2例

見られる、B宛字系のものである。いずれにしても両用字共平安以前
のかなり古くからの通用が確かめられる貴重な例であろう。

オモシロシの今昔中の用例はすべて32例、そのうち19例が巻二十二
以降の本朝世俗部に見えすべて「謔」を用いている。天竺部にも2例
の「謔」が出るが、どちらも巻五の「一角仙人被負女人従山来王城語
第四」中のもので、この物語は巻五の中で和文性がとくに目に立つも
のである。震旦部には「面白シ」1例のみが巻十の「震旦三人兄弟完
家見荆枯返直住語第二十七」にある。本朝仏法部には両用字が並存し、
「謔」は、

巻十二―於比叡山行舍利会語第九

巻十九―東三条内神報僧恩語第三十三

巻二十一―豊前國膳広国行冥途帰来語第十六

に各1例の3例。「面白シ」は、

巻十三―女子死受蛇身聞説法花得脱語第四十三に1例、

巻十四―依千手陀羅尼験力遁蛇難語第四十三に2例、

巻十九―撰津守源満仲出家語第四に2例、

同 一村上天皇御子大斎院出家語第十七に1例、

同 一般若寺覚縁律師弟子僧信師遺言語第二十三に1例、

以上7例である。このうち巻十九―第十七が古本説話集に類同の本文
をもつ以外は、いずれも出典とみられるものは明らかでない。しかし、
話数にすれば五つにすぎず、傍点を付したようにいささかテーマも似
通うかに見えるこれらにおいて、ある程度和文脈化された同一典拠を
もつ可能性を考える手がかりに「面白シ」がなるかも知れない。

さて、冒頭にA訓詁系として挙げたものうち、「微妙シ」と「奇
異シ」は、今昔の情意性形容詞全般の中でも、きわ立って多出するも
のである。また、ともに「微妙ノ・微妙ナリ」「奇異ノ・奇異ナリ」
という漢語的用法も多用されている。このうち「微妙」については、

佐藤氏に詳細な御考察があるので、ここでは、これもオモシロシの場
合と同様、B宛字系の「目出シ」が、天竺・震旦部を中心に見られる
こと、「微妙シ」は逆に天竺・震旦部には出ず、本朝世俗部中心の用
字、「微妙ノ・微妙ナリ」は、本朝仏法部を中心にその前後に裾を引
くように分布する傾向が見られるが、場合によっては、一つの物語の
一文中においてさえ、

○堀川ノ院ハ、地形ノ微妙ケレバ晴ノ所ニシテ、大雲被行ケル時ニ

ハ、尊者ノ車ヲバ堀川ヨリ東ニ立テ牛ヲバ橋柱ニ繋ギテ、他ノ上

達部ノ車ヲバ河ヨリ西ニ立並ベテ有ルガ、微妙也。尊者ノ車別ニ

立タル所ハ、此ノ堀川ノ院ノミノ有ケル。此ク微妙ク御ケル程ニ、

(巻22―第6)

と、「微妙シ」と「微妙ナリ」が並用されることもあることを注目す
るに止めた。ただ、その多用ぶりからして、「微妙シ」あるいは
「微妙ナリ」は、あたかも源氏物語の「あはれなり」、枕草子の「を
かし」に匹敵する今昔物語集を代表する褒め詞といえるものである。
後掲の表1にあるとおり巻ごとの頻出数を見た場合、「微妙」がきわ
立って多出する巻十五は、極楽浄土の「微妙ノ音楽」「微妙ノ荘嚴」
への憧れを語る巻、また、「微妙シ」がきわ立って多出する巻十九は、
現世において「微妙ク時メキ御マス」人々への賛美が主である。当然
のことながら、概して「微妙」は観念的形容、「微妙シ」は実感的形
容だと言えらるだろう。

他方、「微妙」微妙シ」と同様に同一用字を漢語・和語に共用して
いる「奇異」奇異シ」は、巻々の用例分布も表1にあるとおり「微妙」
のあり様と類似している。つまり、「奇異ノ・奇異ナリ」という形は、
天竺・震旦部・本朝仏法部を中心として用いられ、「奇異シ」は天竺・
震旦部には全く出ず、本朝部のみ用語となっている。本朝仏法部で
は両者並用されており、同一物語中で、

○判官代生テ家ニ有ル由ヲ聞テ、敵不信メシテ、奇異ニ思フ事无限シ。……(中略)……敵此レヲ聞クニ、実ニ奇意(異)ク思フ事无限シ。(巻16―第3)

と重出することがある点でも、「微妙」の場合とはほとんど同様である。ただし「目出シ」に相当する「アサマシ」の別用字といったものは見当たらない。

メデタシもアサマシも、周知のように上代文献には確実な例がないが、

○かぐや姫、かたちの世になくメデタキことを、帝きこしめして

(竹取)

○散ればこそいとど桜はメデタケレ

(伊勢82)

○かくアサマシキセらごとにてありければ

(竹取)

○アサマシク対面せで月日の経にけること (伊勢46)

などと、竹取物語・伊勢物語以降のものにおいてはむしろ常用の和語とみられるものである。しかしながら、新撰字鏡・類聚名義抄にはいずれも和訓として挙げられず、色葉字類抄に「美メデタシ・妙メデタシ」「目出・娃婿」とあるのみであって、平安期あるいは漢字を宛てられることは少なかった語というのだろうか。

ともかく、冒頭に挙げた他の形容詞や、あるいは目出シ・面白シなどと異なり、「微妙シ・奇異シ」については、今昔は格別の関心をもって今昔なりに用字選定をした可能性もあるものである。とくにメデタシは、いちおう通用性もあつたかと思われ、「目出シ」を天竺部等で使用しながら、漢文出自の物語を記述する中で、ふと「微妙」こそメデタシのことだとひらめいて、本朝部以降はその用字に執心し、同様に確たる漢字表記のなかつたアサマシも、ふと「奇異」こそそれだとして用いたのであつたというのではないだろうか。さらに、両語の情態形容詞中でのきわ立った多用と、両語似通った巻々の分布状況等を

見たとき、あるいは今昔は、

○世ニ此ク奇異ク微妙キ事ヲ見ツル事ヲ悲シビ貴ビテ、

(巻15―第41)

この物語を編纂した、または「微妙ニ微妙キ」こと、「奇異ニ奇異キ」こと(語)とのおびただしい出会いこそ、今昔物語集の編纂の原点だったと言ふこともできるように思う。

二

今昔物語集の情態性(シク活用)形容詞の中で、情意度は低いにもかかわらずいくつもの用字にゆれているものにカウバシ(香・芳・芬・馥)とウルハシ(美・麗・直・娥)がある。これらについても、巻々の用例分布等佐藤氏の一覧に明らかであるが、以下の考察のため本稿表1にも若干見解をかえて加えた。

まずカウバシについては、天竺・震旦部と本朝部との基本用字が、「香」と「馥」とにはっきり分かれていることが注目される。「芳」「芬」はいずれも天竺部に1例のみ出るにすぎず、書承過程で混入した用字ということであろう。

他方ウルハシについては、岩波大系本がこの訓をあてた字は「美・麗・直・娥・艶」の五字にわたる。「美・麗・娥・艶」はいずれも名義抄にウルハシの訓があり、「直」については名義抄にはないが色葉字類抄に出るものである。ちなみに名義抄でウルハシの訓をもつ字は百字以上にのぼっている。右の五字のうち、まず「艶」は、

○世ニ並ビ无ク艶光ヲ放テ、不照ヌ所无ク照シケレバ、

(巻10―第29)

という送り仮名をもたない一例のみであるが、今昔中の「艶」は、この一例を除いても「艶ズ」として用いられるところからも、この場合積極的にウルハシとして用いられたものではなく、むしろ音

表 1

語	目出	微妙	アサマシ	奇異ナリ	ウルハシ	カウバシ	オモシロシ	オカシ	イブカシ	イカメシ	ハカナシ	イトヲシ	ムツカシ	ワリナシ
卷	微妙	目出	奇異	直	美	香	面	可	不	器	基	糸	六	破
1	4	5	4	4		1								
2	3			11		4								
3	1	9		2	2				1		1			
4	2	5		2	1	2			1			1		
5	7	8		8	1	1	2			4	3	1	2	
6	1	2		3		1			1	1				
7		1		9		1			2	1				
9		2		7						1				
10	1	5		11		3	1			1	2	3		
11	1			13	1	8				1				
12	4	6		19	1		1	1			2			
13		9		15		1	1	2						
14	3	7		3	12		2							
15	7	26		7	12	9			1	1	1	1		
16	2	5	1	18	11	1			2	3	2	1	2	
17	1	3	1	13	2	3			2	1				
19	29	6	29	4	4	1	4	6	5	1	4	1	3	
20	9	2	9	4	13	4	1	1	5	1	4			
22	21	1	21	3	1		1	4			2	1	4	
23	3	1	3	2	9		2	2	1	1		5		
24	19	7	19	6	8	5	8	22		1	7	8	2	
25	1	2	1		4		1	1	1	1	1	1		
26	7	2	7	2	33		3		2	1	1	4	6	
27	10		10	2	31	1	1	3	5	1	1	2	1	
28	14		14	4	23	1	5	32	2		6	11	3	
29	5		5	6	28		2	2	2	1	4	11	3	
30	12		12	2	16	4	4	11		2	3	9	1	
31	17	1	17	1	23		1	1	10	3		4	3	

(注) 数字は用例数。下の○は各辞書に挙がるもの。△は別字で挙がるもの。①「美・妙」
 アサマシの用字には「奇意・奇異」も含む。ムツカシには「気六借シ」も含む。へはカナで出るもの。

新撰字鏡							○	○						
類聚名義抄	△		○	△	○	○	△	◎	◎	◎	◎			
色葉字類抄	△	○△	○	○△	○△	○	△	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
伊波	○	○	○	○△	○	○		◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

読する方がよいのではないだろうか。ところで今昔は、人の容色について妻める時に、

○汝才妻端蔽美麗ナル事苦薩ノ如シ。(巻1—第25)

○王、娘亦一人有り、形端正美麗ナル事天女ノ如シ。(巻6—第5)

○天皇、大臣公卿ノ娘ノ形チ美麗ニ有様微妙キヲ撰ビ召ツ、見給テ、

○形有様美麗ナル女有リケリ。(巻10—第5)

○此ノ鳥ノ生乍ラ造リテ食ハム。今少シ味ヤ美キト試ム。……味ヒ

甘シト云ツル者ハ。(巻19—第2)

○煎物ニテモ甘シ、焼物ニテモ美キ奴ゾカシ。(巻30—第12)

○魚ヲ捕ヘテ食フニ、其ノ味ヒ甚ダ美シ。……其ノ味ヒ極テ美也。(巻4—第37)

○一人ノ人青衣ヲ着シ、麗シク花ヲ飾テ、

○故祥蓮、喜タル気色ニシテ姿麗シク、服鮮カニシテ、(巻17—第31)

○美ナル飲食ヲモ、悪シキ飲食ヲモ皆美也ト云ハ何ニ。(巻3—第14)

二字の用例数が接近してどちらを主用字とみなしがたいものでも、巻々の数や分布を確かめると、天竺・震旦部／本朝仏法部／本朝世俗部の切れ目にそった分布傾向をもつ場合が多い。

とまれ、問題は「美麗」にかえて、両字ともに、右の一般的な用字傾向に即して、ウルハシの用字とみなしてよいかということである。まず、「麗」については、

○未ダ生給ヘリ。容顔麗シク、鮮ニシテ更ニ不死給ズシテ御ス。(巻3—第27)

○汝等九百九十九ハ、片輪者トシテ麗シヤ者ヲ咲ヒ蔑ル也。(巻5—第23)

○一人ノ人青衣ヲ着シ、麗シク花ヲ飾テ、(巻7—第9)

○故祥蓮、喜タル気色ニシテ姿麗シク、服鮮カニシテ、(巻17—第31)

○美ナル飲食ヲモ、悪シキ飲食ヲモ皆美也ト云ハ何ニ。(巻3—第14)

というように例は、「微妙」が「微妙ナリ」とあればミメウと音で用いられたとされるのと同様、「美ニ・美ナリ」と音訓みされる。「美也」はさきに「甘美」について挙げた最初の例にも見える。となると、

大系本で、「美ノ者(巻1―第32)・美ノ女(巻4―第8)・美ノ紙(巻14―第44)・美綱(巻17―第8、2例)・美ノ八丈(巻26―第18)」など、ウルハシと訓まれているものは、語尾ク・シクが送られていないことでもあり、ビないしミと音読するほうがよいものであろう。⁶¹
 「美物(巻14―第3)」もビモツでよいとみられる。また、

○中ニ美ト思フ医師ヲ呼テ

(巻24―第7)

という例は、大系・小学館全集・新潮社集成ともに唯一ヨシと訓む「美」である。名義抄の「美」の訓は、「ヨシ・ウルハシ・コトモナシ・アサヤカナリ・ホム・アマシ・カホヨシ・ムナシ・ミ」などであるが、「麗」の場合のようにシク語尾を送られることがない「美」は、

○御夫ノ形ノ美ケレバト、

(巻3―第15)

○此ノ女ノ髪ヲ美キ人ニ付ケバヤ、

(巻4―第15)

○美キ女ノ若キガ傍ニ来タルト臥シテ、

(巻29―第40)

○世ニ有ル女ノ形チ美ト聞ケバ、

(巻27―第7)

など、いずれも「ヨシ」でも訓めるもので、はたして今昔がウルハシの用字に「美」を選んだのかどうかには疑問が残る。

おそらく今昔がウルハシの用字として意識的に選んだのは、

○病癒テ心地直シク成ヌレバ、

(巻15―第34)

○日ノ装束直クシテ檳榔毛ノ車ニ乗テ、前駆ナド直シク具シテ、

(巻20―第3)

○其ノ石ヲ掘リ埋テ上ニ土ヲ直シク置セ、
 という、シク語尾を送ることもある「直シ」だろう。右の「日ノ装束直ク」は、宇治拾遺物語に重出して同じ「うるはしく」という用語があり、「心地うるはし」も常套語である。この「直シ」は、天竺・震旦部には見られず、表1のように本朝部では相当教類用される。意味的には、装束・立居振舞・心ばえ・事のしつらえ等が、それぞれのものなりに欠けるところなくゆき届いて立派であることを褒める言葉で

ある。ひとつだけ注目されることは、

○二人ノ男有リ、皆形良直クシテ、咲ヲ含テ微妙ノ衣ヲ着テ、

(巻14―第2)

○前司ノ年廿余歳許ナルガ形モ美麗ニ心バ、ヘモ直シキ御ス也。

(巻19―第5)

というような男についていう場合は見られても、女の形姿や心ばえについて「直シ」が用いられることはないことである。形容詞語尾が送られる「美」で、本朝世俗部の明らかかな「美シ」を除いた残り8例は、うち6例まで女の容姿にかかわるもの、あと2例も、

○(平仲)品モ不賤ス形チ有様モ美カリケリ。

(巻30―第1)

○一人ノ男子有ケリ。年若クシテ形チ美カリケレバ

(巻27―第25)

と、いわばそれに準じる艶な美しさをいうものである。もしこれらがウルハシの表記であるとすれば、今昔はウルハシを男性的「直シ」と女性的「美シ」に意味分析して意識的に書きわけたということになる。さらに、世俗部に3例だけ出る、

○近ク寄タル氣ハヒ外ニ見ヨリハ娥ク、勞タシ。

(巻22―第7)

○女ノ娥ク思ケレバ夜々召ケルニ、

(巻30―第4)

○(女ノ)極ク娥キ香ノ急ト聞エケレバ、

(巻26―第4)

といった「娥シ」が、名義抄の訓どおりウルハシだとすれば、これもそうした「美シ」の同類となる。

本朝世俗部で一つの和語の用字が三つにもわたるといふのはやや異例である。ここには、特別の事情——今昔の意識的な用字選択がからんでいる可能性を、さらに次章でみてゆきたい。

さて、すでに掲出している表1は、以上一、二章の考察にかかわって、各用語・用字の巻々の用例教を整理したものである。用例教については、馬淵和夫監修『今昔物語集文節索引・自立語索引・漢字索引』を手掛りにしたが、「美シ」等訓のとり方に若干手直しした部分もあ

り、数よりもむしろ分布状態を見る意図のものである。これにおいてとくに注目されることは、すでに個々の用字についてふれたように、天竺・震旦部と本朝部との間、すなわち卷十一以降とそれ以前とで用字の上でかなり明確な切れ目が見られるものの、何らかの全体的な一貫性も窺われることである。今昔の表記や文体については、卷二十二以降とそれ以前の位相に注目されることの方が多いが、この表で見限りの用字については、卷十までと卷十一以降の切れ目の方が顕著である。そこには、本朝部ゆえに、日本的情意の独自性への自覚といったものも何ほどかあったことを窺うことができるように思う。

三

○正直の頭に神やどると申す事がござる。(虎寛本狂言 祢宜山伏) といった「正直」は、お伽話の正直爺さんの中心的役割を思い出すまでもなく、近世以降高度成長期あたりまで、日本の庶民の生き方を律して来た徳目である。この「正直」が、今昔物語集には卷二十までにおいて13例見られる。

ところで「正直の頭に神やどるといった諺からしても、近世以降の語感による「正直」は、たとえば同じく今昔の卷々に一定数の用例があり、現代語でもある「慈悲・因果・功德」などと比べたとき、そこに仏教的ニュアンスは薄いと感ずる。この語が一般に辞書に載せられるのは節用集類からで、名義抄・字類抄に見えないところからは、平安期とくに関心を持たれた言葉というのではなかったのだから、今昔は、単に書承用語として、機械的にこの語を用いたにすぎなかったのだからか。しかしながら、「微妙」にせよ「端正美麗」にせよ、人間評価にかかわる用語は、常套化しながらも大いに意識的に用いられると見られるのが今昔でもある。

○香姓婆羅門心正直ニシテ智有り。

(卷3—第35)

○(天竺の太子)形貞端正ニシテ心性正直也。(卷4—第21)

○(長安の女)形美麗ニシテ心正直也。(卷10—第21)

○(源信の父)道心ハ无ケレドモ心ハ正直也ケリ。(卷12—第32)

○(翁和尚)心正直ニシテ永ク謡曲ヲ離レタリ。(卷13—第14)

○(大納言安世)形チ美麗ニシテ心正直也ケリ。(卷19—第1)

岩波大系本が、典拠かと見られる漢籍仏典にこの語を求めて得られなかったことは、右の卷三や卷七の用例の頭注に窺われるが、仏教語辞典等で確かめる限り、「正直」は法華経方便品他仏典出自の用語であることは確実である。もとよりシャウヂキは呉音であるし、所出が卷二十までに限られ本朝世俗部には皆無である点、表2に挙げる「人間・飲食・生死」等の仏教語出自の漢語群と同様なあり方をしてい

さて、右に挙げた用例において、「心正直ナリ」とはかなり常套句であることみなされるが、二章の「直シ」のところで挙げた用例、

○形モ美麗ニ心バヘモ直シキ (卷19—第5)

などは、右の卷十・卷十九の「正直」の出る文脈とそのまま重なるものである。すなわち、「直シ」はある場合には「正直」の翻訳語的な使用が今昔でなされている可能性が、こうした用法の重なりからは推察される。本朝仏法部の「直シ」は、

○(道照和尚)智リ広ク心直シ。(卷11—第4)

○(妙達和尚)身清クシテ心直シ。(卷13—第13)

○入道、本ヨリ心直クシテ、邪見放逸ヲ離タリトヤ。(卷15—第31)

○(丹波中将)本ヨリ心直シクシテ謡曲无カリケリ。(卷15—第43)

等と、ほとんどがとくに僧の心について「直シ」とするものであるが、このうち最後に挙げた卷十五—第四十三「丹波中将雅通往生語」は、法華験記卷下一〇二が典拠となるもので、験記の方には、

○心操正直ニシテ、語諛ヲ離ル。

と、「正直」が見られる。あるいはこれはさきに挙げた卷十三―第十四の「正直」の用例ともほぼ同文脈である。また、卷々の用例の分布で言えば、「正直」と「直シ」の分布状況は、あたかも「微妙」と「微妙シ」、「奇異」と「奇異シ」の分布と類似して、本朝仏法部で「両語重出しながら、漢語「正直」はより前半に、和語「直シ」はより後半にという広がりとなっている。

一般に平安期の他文献の用例では、ウルハシは、二章でもふれたように、ものごとのたまたまのそのものなりの端麗さを言うのが普通で、

○此大領ガ着タル衣ノ直シク、微妙ヲ見テ、
(卷23―第18)

○其ノ石ヲ掘リ埋テ上ニ石ヲ直シク置也。
(卷29―第27)

といったように、今昔の「直シ」も過半はその系統のものであるが、「心直シ」という右のような場合、翻訳語的に意味を敷衍拡張させて用いたと見るべきだろうか。あるいは、

○然様ノ鬼神ハ横様ノ非道ノ道ヲバ不行ヌ也。只直シキ道理ノ道ヲ行ク也。
(卷27―第23)

の「直シ」を大系本が「タダシ」と訓んだように、「正」と共にタダシの用字としたつもりだった可能性もないわけではなく、ウルハシもタダシもいずれもシク活用のため判断が難しいところである。

ところで、右にひいたうち、「心正直ニシテ」(卷13―第14)「身清クシテ心直シ」(卷13―第13)は、いずれも法華験記に典拠風のものが見られるが、そこでは、

○其心清浄ニシテ、遠ク詔曲ヲ離レ、(下109)

○心行清浄ニシテ染着スルトコロナシ。(上8)

とあって、「正直」あるいは「直」は用いられず、代わりに心「清浄」という用語が見られる。「清浄」は、「キヨシ・キヨム」といった語に通ずる「正直」よりもより古来の日本の価値観にかかわると見られ

る用語で、色葉字類抄にも出るが、今昔にも、

○身心清浄ニシテ、
(卷11―第26)

○聖人ノ信力清浄也。
(卷12―第37)

○聖人沐浴シ清浄ニシテ、
(卷20―第12)

と、やはり本朝仏法部までに用いられている。ただ意味的には、「心清浄」というより、沐浴して身を清浄に保つといった場合が、今昔ではより一般的である。

經典経文の中のどの用語にとくに思い入れをして重用頻用するかは、平安期、寺院や僧団によって異なるということは当然であったであろうし、そうした中でそれらの用語が日本語としてこなれてゆく過程も、また様々であっただろう。類同文脈内における今昔と験記の右のような用語の位相は、それらの用語が、それぞれにおいてまだ生硬な漢語であって、こなれた日本語となつてはいなかったことを示唆しているのかもしれない。

さて、さきにも述べたように「正直」も「清浄」も今昔では卷二十までの用語であるが、他にもかなりな用例数で出る現代も通用の漢語、たとえば「善悪・飲食・衣服・生死・人間・浄土」等々が、今昔中では卷二十までの用語に限られるということがある。当然これらは、仏典から日本語にはいったとみられるものだが、そうしたものの中でも「慈悲・功德・因果」などは世俗部にも見られ、世俗社会への仏教語の浸透度といったことがある程度窺われる。逆に本朝世俗部のほうで主として用いられる漢語には「愛敬・案内・消息・沙汰・装束」などがあり、全般にわたって用いられている「希有・例・役・座」といったものもある。表2には、それらの語が各巻中何語にわたって用いられているかを、なるべく多くの用例をもつ用語によって拾ったものである。もともと対応する和語がなく、漢語に動詞語尾スをつけて日本語化し、以後現代まで主要な動詞として用いられている「信ズ・感ズ・

表2

昼日夜 夜夜前	沙案装愛消得 汰内束敬息意	道宿希 例役座 理世有	愛感信 スズズ	慈功音世利因因婦地極 悲徳案界益縁果依獄楽	浄衣飲生人善殺憊清正 土服食死間悪生悔浄直	語 巻
		1 1 2 3 1 7	3 6	8 10 4 1 1 7	2 6 2 2 2 1 5	1
3		5 2 4	5 5 4	3 18 2 1 4 1 9	5 5 1 2 2 6 2 2	2
2		3 3 1 4	1 3 5	1 8 5 4 1 4	3 3 3 1 1 2 6 3 1	3
2		2 1 3 2	2 6	4 6 5 1 2 4 2	3 1 1 2 1 2 3 1	4
	1	1 3 1	1 5	2 2 1 1 3 1 2 1	2 5 1 1 1	5
2		5 2 3	1 9	2 1 1 3 2 1 0 1 1 5 8 8	1 1 4 2 1 3 1 3 4 4	6
3		2 1 4	1 11	3 1 3 1 1 5 5 1	3 3 1 1 0 1 7 2 1	7
2		1 3 5 5	2 9 1 0	3 1 1 1	2 4 3 2 6 2	9
2	1	2 1 3 1 2	2 1 3	2 1	2 1 1	10
2 1	1	4 2 3	2 1	1 3 4 5 2 5 1 3	1 1 1 3 3	11
3 6	1 2	5 4 3 5	6	3 1 0 7 4 4 1 1 5	3 1 2 2 1 2 5 1	12
8 2 0 1	1 2	2 2 5 2	3 2 5	4 7 1 1 3 1 2 4 1 1 2	1 1 3 2 2 5 2 2 1 1	13
6 1 5 3	1	1 2 2 7 1 2	1 1 2	1 1 1 2 1 3 2 2 1 2 3	3 3 2 2 2 1 8 1 1	14
4 1 4 2	2 1	1 4 4 2	1 1 0	7 6 2 2 2 1 1 4 4 3 4 3	1 1 6 1 2 5 1 4 1	15
1 3 4	1 2 1	3 3 6	3 1 7	8 1 1 1 2 2 2 1 1	3 1 1 1	16
2 1 3	1 2 3	1 3 5		5 4 1 1 4 1 1 1 5 2 6	2 1 2 1 1 3 4 1	17
1 3	1 1 1 3 2 1	1 1 1 0 5 3	8 2 3	5 6 1 2 3 1 3 5	1 1	19
1 1 1	1 1	1 1 3 1	1 1 1 9	3 5 2 1 3 1 2 3	1 1 2 1 1 1	20
	2	1 1				22
	1	1 3 3				23
1 2	1 3 3 1 2	1 5 4 1	3 9	1 1		24
2	1 3 1	1 2 1 1	2 1	1		25
1	4 1 7 1 2	5 6 5 2	2 1	1 2		26
5	2 2 2	3 1 9 8 2 1	1 2	1		27
1	2 4 9 3 2	3 3 1 0 9	1 2 3	1 1 1		28
3 3	1 1 5 3 3	2 3 4 3	2	3 1		29
	1 1 2	3	2			30
2	2 2 4 2	1 1 4 7	2 1 1	1 1 1 1 2		31
○	○○ ○○	○ ○○○	○	○○○	○ ○○	色

(注) 現代も通用の語で、一語以上に出るもの。同抄にも出ないもの。少数字は各巻におけるその語が出る話数。

「愛ス」も、表に入れてみれば、今昔のころからようやく一般化しつつあったことが見てとれるだろう。あるいはまた、「衣服」と「装束」は、僧界と俗界ではつきりわかれていた用語であったこと（「飲食」に対する「食物」は全巻にわたって出るが、本朝世俗部でジキモツかクヒモノかどちらの訓が適切かは不明）なども注目される。これらの漢語における今昔の用語的特徴の切れ目は、明らかに本朝仏法部と世俗部の間で大きい。最後の卷三十一は、しばしば世俗部中での異質性が指摘されることがあるが、用語においても他の世俗部に出ないものが出るということが表に明らかであり、何らかの拾遺要素も考えられるのかもしれない。今昔編纂者の整然たる類纂意識からしても、天竺部五巻震旦部五巻計異国部十巻、本朝仏法部十巻、本朝世俗部十巻というものが、当初の構想であったのではないだろうか。

とまれ、誠に大部広範な今昔物語集の用字・用語について吟味検討すべきことは多い。そして物語集としてのその性格から、そうした言葉についての問題が、今昔個別の問題にとどまらず時代の一般的あり様にじかに繋がるまことに有難い作品としての位置を今昔はもつと言うことができるだろう。

注

- (1) 佐藤喜代治編『漢字牌座5（今昔物語集）田中牧郎氏担当』（明治書院）に簡潔な整理がある。
- (2) 『今昔物語集の語彙と語法』（明治書院）第三章。
- (3) 注(2)第二章第七節。
- (4) 一例だけ「微妙ジクテ」（卷24―第31）と訓まれる例があるが、同語は、さかんに「微妙シ」と「極ジ」が用いられ、「目出タガル」「目出入ル」もある。何らかの錯綜、あるいは意図しての「あそび」といったものがあったのかもしれない。
- (5) 山口佳紀「今昔物語集表記法管見」（国語と国文学第43巻第12号）
- (6) 小学館全集・新潮社集成は、「美ノ紙・美ノ八丈」はミノ（美濃）としている。
- (7) 『塵袋』卷九「美物」参照。
- (8) 「仏のいとうるはしき心にて」（源氏 蜷）という用例を『源氏物語玉の小櫛』は「きつとして正しい」と解釈しているが、それはすなわち漢語でいえば「美麗」より「正直」である。翻訳の意味拡張があったとしても必ずしも今昔独自ではないということだろう。
- (9) 宮地敦子「『愛ス』考」（国語国文学第35巻第6号）
拙稿「古代日本語における「信ず」の成立まで」（奈良大学紀要第16号）

なお、例文の引用は、岩波古典大系本によった。

The Consciousness of the Use of Chinese Characters
in Konjaku-Monogatari-shū (今昔物語集)

Noriko KIMURA